第４章

愛着度形成要因の分析

データサイエンス学部　　栗田真奈加

１．問題の所在

現在、日本の地方部では人口減少及び少子高齢化に加え、転出超過も重なり若年人口の減少が課題である。総務省による住民基本台帳人口移動報告（2022）から 1954 年から 2022 年までの 3 大都市圏の転入超過数の推移を見ると、名古屋圏と大阪圏でも転出超過に転じており、東京圏の転入超過が拡大傾向であることが分かり、地方から大都市、特に東京圏への人口移動が見られる。今回の調査対象地域である長浜市でもこれらの課題は見られ、若年人口が減少を続けると地域経済の低迷や地域の活性化の阻害というような弊害をもたらすと考えられる。

ここで若年層における転出超過の要因として、地方では進学先や就職先の選択肢が限られるため、高校卒業後に大学等への進学や就職のために地元を離れるという状況が考えられる。そして UI ターンが少ないことは生産年齢人口が減少を続けている要因として挙げられる。特にＵターンに注目すると、厚生労働省による人口移動調査（2018）により「Ｕターン者」を出生都道府県から県外に移動したのち、再び出生都道府県に戻った人としたとき、Ｕターン者割合は男女・年齢を合わせた総数では 20.4%であり、第 7 回調査（2011 年）、第 6 回調査（2006 年）と比較して、ほぼ同水準であることが示されている。しかし年齢別に見ると、15～29 歳においてＵターン者割合は低下している。また、都道府県別の県外移動歴を合わせて見ると、転入者をＵターン者と県外出生者（国外出生者）としたとき、非大都市圏の地域における転入の大部分がＵターン者によるものであることが示されている。よって若年層ではＵターン者割合は減少しており、転入者を増やすことにはＵターンが重要であると考えられる。

そこでＵターンを選択する理由について見ると、労働政策研究・研修機構の若年期の地域移動に関する調査（2016）より実家への同近居や仕事の都合とともに「愛着のある地域であること」が理由の上位に挙げられている。また、子どもの頃の地元への愛着が将来の定住やＵターンに繋がるのではないかと考える。

以上を踏まえ、地元への愛着度を高める要因を分析する。続く第 2 節では先行研究を整理し、本稿の仮説を検討する。第 3 節では使用するデータと変数の選択、及び整理を行い、第 4 節で分析結果について報告する。最後に第 5 節で分析結果を基に考察を行う。

２．先行研究と仮説の検討

２－１．先行研究

鈴木と藤井（2008）は、地域風土への移動途上接触が地域愛着に及ぼす影響について醸成期間を考慮し検討した。ここで地域愛着について、個人的な嗜好の観点から地域を肯定

的に評価する「選好」、嗜好を超えて地域に対して慣れ親しんだものに深くひかれ、離れがたく感じる「感情」、嗜好や感情といった現状の地域に対する認知的、情緒的な地域への心的関与のみでなく、地域のあり方そのものに対して願いを抱く「持続願望」の 3 尺度を用いている。移動途上において地域風土との接触が多くなると地域への選好が高まることを明らかにした。

籔谷と阿久井（2021）は、高校生の通学時における地域接触が地域愛着の醸成に与える影響について検証した。前述の研究の結果が高校生の通学時においても当てはまることを明らかにした。通学時の人や自然との接触が選好・感情の地域愛着に繋がっており、子どもの頃の地域愛着醸成が U ターン意識や地域接触活動への参加意識の向上に繋がる可能性を示唆した。

引地ら（2009）は、地域環境を、景観や歴史的風景、ランドマークなどに関する物理的環境と、住民との交流やイベントなどソーシャルキャピタルに関する社会的環境の 2 つに分け愛着形成に与える影響について検討した。地域環境に対する評価が高いほど地域愛着が強まること、社会的環境は物理的環境に比べて愛着形成により強い影響を与えることが示された。先行研究では、都市部、郡部が偏らないように調査対象地域が抽出されているが、歴史的資産の保有量の違いなどがこの結果に影響を与えている可能性を考えられる。長浜市に限定することで、長浜市における地域環境の愛着形成への影響を正確に求めることができる。

２－２．仮説の検討

以上より本稿では仮説を 2 つ設定する。第一の仮説として、「自然が好きな人ほど、長浜市への愛着度が高い」を設定する。籔谷と阿久井（2021）は通学時に限定して地域接触と地域愛着との関係を検討しており、食や自然、人、調査対象の富山県小矢部市で特徴的なメルヘン建築との接触を考えられていたが、本稿では自然に注目して仮説を設定する。また普段から積極的に自然と関わっているかどうかを重要視し、自然との関わりを積極的に持つことを自然が好きであることと考え、地域愛着形成との関係を検討する。これは湖や山などを身近に感じられるような豊かな自然が長浜市の魅力の一つであると考えているからである。自然が好きであれば、長浜市のそのような魅力に惹かれ、愛着を持つことにも繋がるのではないかと考え、この仮説を検証する。

第二の仮説として、「長浜市の歴史伝統に興味関心がある人ほど、長浜市への愛着度が高い」を設定する。引地ら（2009）は社会的環境が物理的環境に比べて愛着形成により強い影響を与えることを示唆した。しかしそれらの地域環境に対する評価にはそれぞれの趣味嗜好が影響していると考えられる。そのため、趣味嗜好という観点から歴史伝統に着目する。歴史伝統に興味関心を持っている人は、長浜市の歴史溢れる街並みに愛着を持つのではないかと考え、この仮説を検証する。

３．使用するデータと変数

３－１．使用するデータ

使用するデータには、「長浜市中高生調査（こども若者実態調査）」（以下本調査と表記）を使う。長浜市の中学校・高等学校に通う生徒を対象としたアンケートを用いる。調査の

概要を表 1 に示す。このデータでは地元に対する考えや将来についての考えについて尋ねており、本課題を行う上で適切なデータである。なお長浜市内在住の高校生に限定して分析を行う。

表 1．調査概要

調査名	長浜市中高生調査（こども若者実態調査）
調査対象	長浜市内の公立高校
調査時期	令和5年7月20日～9月11日
調査方法	インターネット調査（生徒に調査依頼および回答先のQRコード付き案内チラシを配付）
抽出方法	全数調査
サンプルサイズ	900

※調査の詳細は第1章に記載

３－２．使用する変数

従属変数には、全ての仮説に対して「長浜市に親しみや好きという気持ちはあるか」の項目を長浜市への愛着度として使用する。本調査では、「1. ある」「2. どちらかと言えばある」「3. どちらとも言えない」「4. どちらかと言えばない」「5. ない」の 5 件法で尋ね、変数の値を反転させた。

独立変数には、仮説 1 では 30 項目の中で好きなものを複数選択する項目を使用し、30 項目の中で「釣りや川遊びをする」、「キャンプをする」、「スキーやスノーボードをする」、「自然豊かな場所でリラックスする」の 4 項目のうち選択した項目数の合計を「自然好きな度合」として使用する。仮説 2 では「長浜市の歴史や伝統文化に関心があるか」の項目を長浜市の歴史伝統への興味関心として使用する。本調査では、「1. かなり関心がある」「2. 少し関心がある」「3. どちらとも言えない」「4. あまり関心はない」「5. まったく関心はない」の 5 件法で尋ね、変数の値を逆転させた。

統制変数には、「性別」、「学年」、「偏差値」、「長浜市内の居住地域」、「長浜市の在住年数」、「親の勧め：将来の長浜市居住」を使用する。「性別」は男性ダミー変数とし、「その他・答えたくない」については欠損値とした。「偏差値」は学校を尋ね、偏差値に変換した。「親の勧め：将来の長浜市居住」は「1. よく勧められる」「2. たまに勧められる」「3. まったく勧められない」の 3 件法で尋ね、変数の値を逆転させた。仮説 1 については上記の項目に加え、「長浜市の満足度：自然の美しさ・風景」、「現在の考え：将来、田舎より都会への移住を希望」を統制変数として使用する。「長浜市の満足度：自然の美しさ・風景」は「1. 満足」「2. どちらかと言えば満足」「3. どちらとも言えない」「4. どちらかと言えば不満」「5. 不満」の 5 件法で尋ね、変数の値を逆転させた。「現在の考え：将来、田舎より都会への移住を希望」は「1. そう思う」「2. どちらかと言えばそう思う」「3. どちらかと言えばそう思わない」「4. そう思わない」の 4 件法で尋ね、自然好きであれば田舎をより好むと考え、変数の値は逆転せず統制変数に加えた。仮説 2 については上記の項目に加え、「長浜市の満足度：地元の祭り・イベント」を統制変数として使用する。本調査では「1. 満足」「2. どちら

かと言えば満足」「3. どちらとも言えない」「4. どちらかと言えば不満」「5. 不満」の 5 件法で尋ね、変数の値を逆転させた。

また、全ての変数について「9999 無回答」を欠損値とした。

表２に使用する変数の記述統計量を示す。この表によると、長浜市への愛着度は平均値が 4 でばらつきが小さく、愛着を持っている人の方が多くいることが確認された。

表２．使用する変数の記述統計量

変数	n=670 Mean(%)	SD
従属変数		
長浜市への愛着度	4.01	0.991
独立変数		
自然好き度合	0.68	1.096
歴史への興味関心	3.01	1.094
統制変数		
性別		
男性	44.9	
女性	55.1	
学年	1.6	0.712
偏差値	49.64	10.135
長浜市内の居住地域	2.72	2.277
長浜市の在住年数	15	3.05
親の勧め：将来の長浜市居住	1.424	0.642
長浜市の満足度：自然の美しさ・風景	4.01	0.888
現在の考え：将来、田舎より都会への移住を希望	2.32	0.918
長浜市の満足度：地元の祭り・イベント	3.98	0.896

４．分析

４－１．基礎的な分析

まず基礎的な分析として、2 つの仮説をクロス集計で示す。仮説 1 の自然好き度合別の長浜市への愛着度についてクロス集計したものを図 1 に示す。クロス集計の結果、自然好き度合によって長浜市への愛着度には差があることが示された（χ^2=38.712, df=16, p=0.001）。

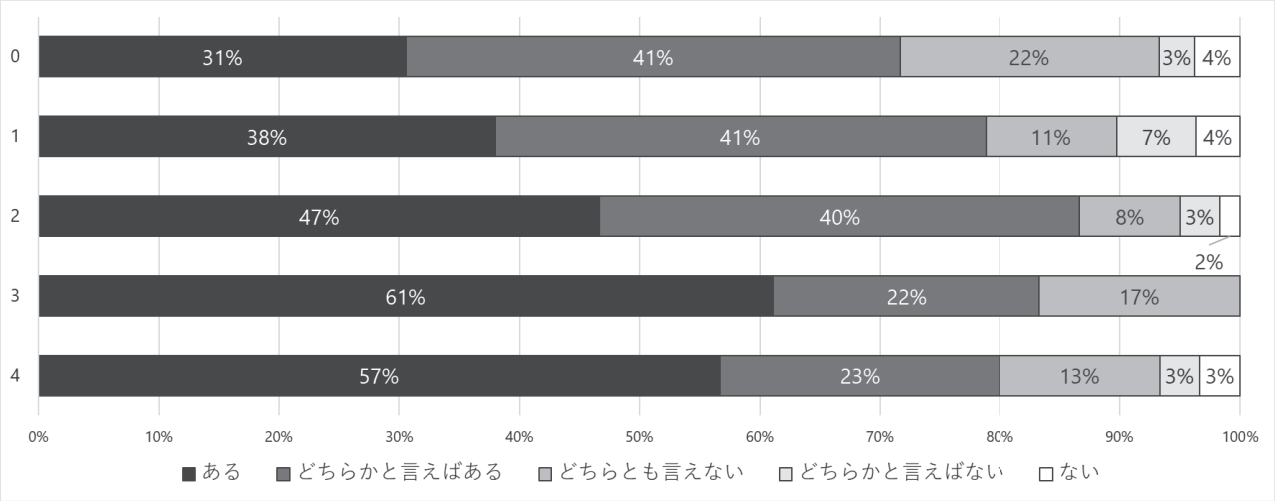

図１．　自然好き度合別の長浜市への愛着度（仮説 1）

次に仮説 2 の長浜市の歴史伝統への興味関心別の長浜市への愛着度についてクロス集計したものを図 2 に示す。クロス集計の結果、長浜市の歴史伝統への興味関心によって長浜市への愛着度には差があることが示された（χ^2=258.655，df=16，p<0.001）。

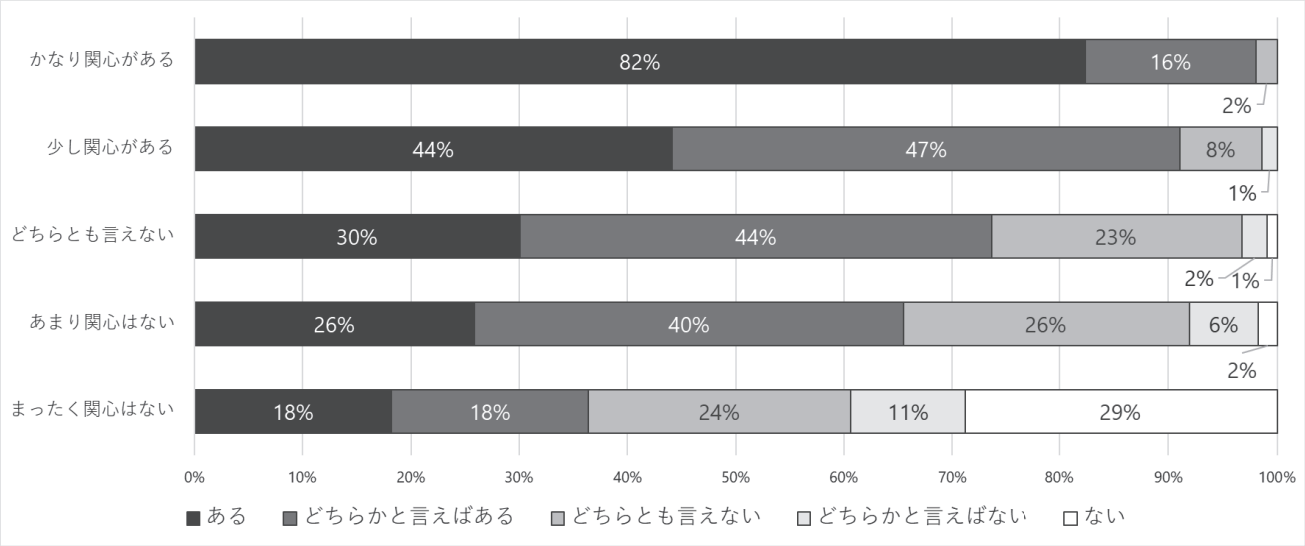

図2．　長浜市の歴史伝統への興味関心別の長浜市への愛着度（仮説 2）

以上の結果から自然好きな人ほど長浜市への愛着度が高いこと、長浜市の歴史伝統に興味関心がある人ほど長浜市への愛着度が高いことが示唆されているが、性別や学年といった別の変数と交絡している可能性がある。よって、次節では多変量解析によってこれらの変数を統制した上でも、仮説 1、2 それぞれで関連が見られるか確認する。

４－２．多変量解析

本節では、2 つの仮説それぞれの独立変数の効果が他の変数を統制しても影響があるか、多変量解析によって検討する。表 3 は重回帰分析の結果である。この表によると、クロス集計表で確認した通り、仮説 1 の自然が好きな人ほど長浜市への愛着度が高いこと、仮説

2 の長浜市の歴史伝統に興味関心がある人ほど長浜市への愛着度が高いことが分かった。統制変数では「長浜市の在住年数」、「親の勧め：将来の長浜市居住」、「長浜市の満足度：自然の美しさ・風景」、「現在の考え：将来、田舎より都会への移住を希望」、「長浜市の満足度：地元の祭り・イベント」の 5 変数で有意な結果が得られた。

以上の結果より、仮説 1、2 ともに仮説通りの結果が得られた。この結果を踏まえて次節では考察を行う。

表３．重回帰分析の結果

変数	非標準化係数 B	非標準化係数 標準誤差	標準化係数 B	有意確率
切片	0.716	0.272		**
自然好き度合	0.106	0.028	0.118	***
長浜市の歴史伝統への興味関心	0.258	0.030	0.285	***
性別（男性ダミー）	-0.022	0.062	-0.011	
学年	-0.037	0.044	-0.027	
偏差値	-0.004	0.003	-0.039	
長浜市内の居住地域	-0.012	0.014	-0.028	
長浜市の在住年数	0.011	0.010	0.035	*
親の勧め:将来の長浜市居住	0.110	0.049	0.071	*
長浜市の満足度：自然の美しさ・風景	0.262	0.039	0.235	***
現在の考え：将来、田舎より都会への移住を希望	0.176	0.034	0.163	***
長浜市の満足度：地元の祭り・イベント	0.238	0.038	0.215	***
n	670			
R2	0.378			
調整済みR2	0.368			

Note.　*p ＜ .05 **p ＜ .01 ***p ＜ .001

５．考察

本稿では地元への愛着度を高める要因について調べるために検証を行った。2 つの仮説ともに性別や学年などの変数を統制した上で有意であることが示された。

仮説 1 である「自然が好きな人ほど長浜市への愛着度が高い」が有意な結果となったことから、自然好きであることは長浜市への愛着度を高める要因となることが考えられる。

仮説 2 である「長浜市の歴史伝統に興味関心がある人ほど長浜市への愛着度が高い」が有意な結果となったことから、長浜市の歴史伝統に興味関心を持つことは愛着度を高める要因となると考えられる。

また、自然好き度合に比べて、長浜市の歴史伝統への興味関心の方が長浜市への愛着度に強い影響を与えることが示された。自然を好きになってもらうことよりも長浜市の歴史伝統に興味関心を持たせる取り組みの方が長浜市の愛着度を高めるために重要であると考えられる。

最後に残された課題について 2 点指摘する。1 点目は本稿の自然好きの定義としては「釣りや川遊びをする」、「キャンプをする」、「スキーやスノーボードをする」、「自然豊かな場

所でリラックスする」の 4 つのうち選択した数を用いていることである。自然という大きなカテゴリの中でも前の 3 つは活動的で自然に対して積極的に触れるものであり、最後の「リラックスする」は積極的でなくても日常にある自然をイメージする場合もあると考えられる。このように自然好きの定義は明確ではなく、長浜市の魅力の 1 つである自然のイメージと一致していないと正確に長浜市における自然と愛着度の関連を検証することができないと考えられる。さらに自然好きを定義する質問項目を加えることで異なる結果が得られるかもしれない。

2 点目は調査対象について、本稿では長浜市在住の高校生を対象とした分析を行ったが、高校生以下の年代、特に幼少期の自然や歴史伝統との関わりを検証する必要がある。また、本稿で長浜市在住の高校生に限定したように、先行研究を含め特定の年代、地域に限定して調査を行っていることが多い。今回の結果は長浜市の高校生に限定的な結果であるかもしれないため、幅広い年代を対象とした全国サンプルを使用した分析を行うことによって、日本全体について議論することができるだろう。

６．むすび

地方での若年人口の減少が課題となっている現代において、地方に住む若者が地元を離れないように、U ターンを増加させるように対策を講じることが必要である。本稿の結果から対策について検討すると、自然を好きになる、歴史伝統に興味関心を持つような機会を増やすことが求められるだろう。機会について具体的には授業の中で課外活動や地域の人との交流を取り入れることが挙げられる。特に歴史伝統については、全く知らないものに対して興味を持つように、積極的に触れるようになることを望むのは難しいだろう。そこで消極的であっても必然的に触れる授業という義務的な場において、まず「知る」機会を作ることは有効的ではないだろうか。

参考文献リスト

厚生労働省，2018，「2016 年社会保障・人口問題基本調査　第 8 回人口移動調査　報告書」，国立社会保障・人口問題研究所ホームページ，（2024 年 2 月 6 日取得，https://www.ipss.go.jp/syoushika/bunken/data/pdf/210336.pdf）.

鈴木春菜・藤井聡，2008，「「地域風土」への移動途上接触が「地域愛着」に及ぼす影響に関する研究」『土木学会論文集 D』64(2)，179-189

総務省，2023，「住民基本台帳人口移動報告　2022 年（令和 4 年）結果」，総務省統計局ホームページ，（2023 年 8 月 5 日取得，https://www.stat.go.jp/data/idou/2022np/jissu/youyaku/index.html）.

引地博之・青木俊明・大渕憲一，2009，「地域に対する愛着の形成機構―物理的環境と社会的環境の影響―」『土木学会論文集 D』65(2)，101-110.

籔谷祐介・阿久井康平，2021，「高校生の通学時における地域接触が地域愛着形成に与える影響――富山県小矢部市内の高校に通学する高校生を対象として」，『都市計画論文集』56(3)，772-779.

労働政策研究・研修機構，2016，「UIJ ターンの促進・支援と地方の活性化――若年期の地域移動に関する調査結果」『JILPT 調査シリーズ』152.